

香川少飛会

空中戦の生き残りは我一人

香川県 大村 清美

陸軍少年飛行兵第十一期生。昭和十八（一九四三）年十二月一日から、昭和二十一年二月十九日復員まで。

昭和十八年十二月一日

飛行第二十戦隊、大阪府伊丹飛行場にて編成
完結。

同年十二月六日

伊丹飛行場より大阪府八尾飛行場に移動。二
個中隊編成。毎日一式戦闘機隼II型にて訓練実
施。隼型は脚が弱く、着陸時、滑走末期に引ッ
かけられて飛行機破損、プロペラ曲がり事故機
多数出す。

大阪湾上空において実弾射撃訓練、編隊飛
行、戦闘訓練を実施。

昭和十九年二月二十一日

戦隊全機千葉県柏飛行場に進出。同飛行場に
は飛行第一戦隊が防空任務に従事しました。第
20戦隊は帝都防空任務につき戦闘訓練を行
い、雪解けを待つて北方方面進出の機を待つ。

昭和十九年四月五日

山本戦隊長以下全機編隊を組み、一路北海道
勇払郡沼の端に向かう。津軽海峡上空にて雪吹
雪に遭う。沼の端飛行場は一面銀世界で、飛行
場の確認は困難を極めた。

四月二十一日

中千島に転進命令下る。第三中隊八機、先発
として帯広飛行場に前進。千島に先発したが、
途中悪天候のためエトロフ島天寧飛行場に着
陸。

昭和十九年五月九日

エトロフ島天寧飛行場離陸。得撫島東雲飛行

場に着陸、戦隊主力と合流する。

五月十二日

中千島松輪島が「敵機に空襲されている」との情報が入り、第三中隊は直ちに松輪島に向かう。

飛行場の滑走路は幅五〇メートルあるが、半分程雪を取り除いて三五メートル幅で離着陸。いかなる時も西向きでなければ着陸できず、大変苦労した。

五月末、午前八時頃

松輪島湾内、昨夜、満州より入港したばかりの輸送船三隻の内二隻が、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて撃沈された。ほとんどが戦死。飛行場は濃霧のため離陸不可能だった。

六月十三日

午前二時頃より濃霧の中、敵艦が艦砲射撃を四十分間受ける。

六月十四日 松輪島にB24、三機侵入、大塚軍曹機で迎撃、一機を撃墜。

六月

立川飛行場にて飛行機集の新品を受領し試験飛行。

六月二十七日頃

新田原飛行場より沖縄那覇飛行場に飛ぶ。

八月十日頃

田中中尉、浜武曹長等と大村伍長、立川へ飛行機受領に行き無事空輸を終わる。

八月二十六日

主力読谷山飛行場離陸、台湾台北に飛ぶ。

八月二十七日

大里大尉、大滝軍曹と大村伍長出発、悪天候のため台北に進入できず、花蓮港飛行場着陸。

八月二十八日

花蓮港飛行場発、台北飛行場着。同日、少飛行一期小嶺伍長、不時着、発火焼死する。

九月八日

防空任務につき、その間猛訓練続く。

九月二十二日

中国福州に上陸する友軍の船団掩護。

十月上旬

中国の米軍基地よりB 24爆撃機の夜間空襲。

戦闘機迎撃一機撃墜。

十月十二日

台湾沖航空戦始まる。哨戒任務に就く。戦死

三人、一人負傷入院。

戦闘行動。第三中隊八機午前五時離陸、馬公

上空三〇〇〇メートル位にて敵機三〇〇機と交

戦、第一・第二中隊、多数戦死者を出す。

十月十四日

第一中隊長・長山大尉台北上空、空中戦被弾

戦死。生き残った者、台北飛行場に集結。

十月二十二日

戦隊主力比島クラーク地区に前進。

十月二十四日

第三中隊長・長浜大尉、大村伍長二機編隊に

てマニラ西方カロカン飛行場に着陸。

十月二十五日

命により、昨二十四日、海軍の艦隊がレイテ

湾に攻撃を行い、帰還中の艦隊上空掩護を命ぜ

られ、午前八時頃、高浜大尉、大村伍長戦闘機

にて艦隊上空に至る。約二時間、上空掩護終了

後、カロカン基地に無事帰る。高浜大尉入院と

のこと。

十月二十八日

戦隊主力カロカン集結。

十月三十一日

村岡戦隊長、大村、黒島・出葉伍長、船団援

護任務終了。ネグロス島ファブリカ飛行場着

陸。阿久根中尉戦死。

十一月一日

払暁離陸、任務はレイテ島オルモック湾上陸

中の友軍の上空掩護。田中・安藤中尉戦死。

戦闘行動。「午前八時三十分頃、レイテ上空

高度三五〇〇メートルにて、P 38 数個小隊と交

戦、田中、安藤、伊藤中尉戦死、大村伍長は被

弾のため飛行機小破。(被弾四)。

十一月五日夜

木村軍曹不時着するも三日目に現地人に救出され、友軍基地に無事帰還した。

十一月十日

第二次レイテ戦。船団掩護し、レガスピへ飛行場に着陸。

十一月十一日

船団がB25の空襲を受けているとの情報により、村岡戦隊長、作見中隊、大村伍長三機にてレイテ島オルモックに向かう。

掩護戦闘状況（特攻、軍戦闘隊）の引用

『私に続く二番機は大村軍曹、三番機は作見中尉であった。オルモック上空に一〇時頃到着したが、船足の遅い四隻の輸送船は無事航行中で、今まさに、泊地に進入する直前であった。』

間もなく東側の空に二機の機影を発見、敵はグラマンF6Fであり、我が船団に向かって降下突進を始めた。船団に突進攻撃されては一大事と一連射の威嚇射撃を浴びせたところ、敵機

はあわててレイテ湾の方向に逃走していった。

やがて、交代機の編隊が到着したので、我が編隊は掩護任務を終わり、レガスピへの帰路についた。

帰路、セブ島北東海上にさしかかったとき、北方はるか遠くに黒点が二個飛び込んできた。我々と同高度で友軍機かと思われるが彼我不明である。

やがて一〇〇メートル位の間隔ですれ違った。胴体両面に鮮やかな米軍のマークがあった。敵機だ。お互いに優位な位置を占めようとして上昇旋回を続ける。三〇〇メートル位下方から敵の曳光弾が飛び出す、弾道は完全にそれている。やがて敵機は一五〇メートル位下方で失速に近い状態で機首を下げ離脱していった。僚機の大村軍曹、作見中尉も私の後について異常なし。

離脱していった敵機との高度差はさらにひらいたが、再度攻撃する気配を見せている。私は

最良の攻撃位置につくため、さらに上昇を続けた。敵機は接近し射撃して、失速に近い状態で降下離脱する。

このとき、大村軍曹は私を掩護すべく敵と対進状態で撃ち合いとなった。

グラマンは一三ミリ機銃六挺、隼は二挺。大村機はプロペラとエンジン部分に被弾してしまった。しばらくの戦闘の後、あたりを見回すと、さきほど被弾した大村軍曹機がゆるい降下姿勢でセブ島の方向に降下していく。だが、確認するいとまもなく戦闘を続ける。

そこで、編隊を離脱した大村軍曹機を捜すために不時着予想地点のセブ島北端に向かう。付近をしばらく探してみたが、どこにも機影はない。先程の空中戦で増槽は落としており、また、作見機はエンジン不調だから長居はできない。後ろ髪を引かれながらも、大村軍曹機が不事着して、現地部隊に救出されることを念じつつ、作見機を先頭にたてて、これをかばいなが

ら、レガスピーへの帰路についた。

セブ島北端上空で大村軍曹は、エンジン前蓋部のプロペラ、調速機に被弾してエンジンの回転数が一二〇〇から一五〇〇回転までしか上がらず、噴き出したオイルのために防風ガラスもくもり、無念の涙をのんで不時着を決意した。

その後、生死の間をさまよう苦労の末、セブ島からネグロス島に脱出して、十一月二十四日、マニラのカロカン飛行場に奇跡的に生還した。

以上が大村軍曹機の脱出談である。

『不時着した後、近くの原住民の集落を訪ねても人の気配はなく、不穏の気配を感じて近くのヤシ林に入り、ゲリラの襲撃があれば、いつでも自決しうる態勢で休んでいた。

しばらくすると、彼方で騒々しい様子が聞こえ、ヤシ林を出ると異様な風体の者が姿を現し、続いて防暑衣の日本兵が現われて救出され

た。

この部隊は鹿児島県の歩兵部隊でセレベスに向かう途中、艦載機の攻撃を受けて輸送船が沈没し、漂着した部隊で、約百人であった。隼はヤシ林に入れたが、夕刻、無線機と羅針盤を外し、ガソリンをかけて焼却した。調べた結果被弾は十九発であった。』

十一月十五日夜半

船でネグロス島に脱出することにして、私と海軍五人、外九人の十五人で出発した。途中エンジンジンの故障や、船の座礁など、大変な苦労を重ねて、十一月二十日、ネグロス島北端のマナブラ海岸に漂着して、飛行第二〇〇連隊の所在するマナブラ飛行場にたどり着いた。

十一月二十五日夜半

不時着先より大村伍長二週間ぶりに基地に帰還する。

十二月入り

少飛十三期生、菊井、山田、東、石川伍長等着任し来る。

十二月二十日

ルソン島マルコット飛行場より、九七重にて台湾屏東に帰る。十三期生・浜田伍長に会う。

昭和二十年一月四日

戦隊長の命により、伊東中尉、大村軍曹、飛行機受領のため九七重に便乗して、立川飛行場に帰り、所沢にて隼二機を受領し、空路沖縄北飛行場まで空輸。

一月十五日

敵飛行艇一機偵察に飛来。地上部隊の要請により、大村軍曹迎撃のため離陸、敵機を撃退する。実は、輸送中の飛行機で実弾を積んでいた。かた。

一月十六日

伊藤中尉、大村軍曹沖縄読谷山飛行場離陸、台湾に向かう。大村軍曹機右発電機故障のため

め、燃料消費量多く、小港飛行場接地と同時に燃料切れ。エンジン停止。戦隊長よりお目玉を食らう。

二月、二日に入り、少飛十期生丸毛軍曹着任し来る。

二月十五日

有川中尉、木村曹長、大村軍曹の三人、沖繩読谷山飛行場へ飛行機受領に行く。滝平少尉、太田少尉、宮本曹長等と会う。

二月末頃

屏東において、第一次特攻隊を編成する。特操十人、十三期高田伍長。

三月 台中飛行場に移動する。防空任務に服しながら訓練。

四月十五日

伊藤中尉、山口軍曹、大村軍曹夜間飛行にて瀧潭飛行場に帰る。

四月二十二日

宮古島より特攻機出撃のため、上空掩護の任

を受け出撃、グラマンと交戦、四人の戦死を出す。秋山敏春（少飛九期）軍曹は第二四戦隊の要員。

岡部大尉（中隊長）、私は伊藤清中尉の僚機として離陸したが、飛行場上空高度一〇〇メートルにてオイルタンクの蓋が吹っ飛び、潤滑油が流出し始め、直ちに着陸。夕方帰還したのは岡部大尉一機のみ。

私の第三小隊、伊藤中尉、酒井少尉（五十七期）、秋山軍曹の三人も戦死。

昭和二十年六月末

尖閣列島付近に敵部隊がいる様子なので、有川大尉、大村軍曹偵察のため四式戦にて離陸。有川大尉機故障のため着陸。大村軍曹単機にて任務につく。

尖閣列島上空七〇〇メートル付近に、敵P38が四機哨戒していたが、往復とも敵に発見されることなく、付近を偵察して無事帰還した。敵機動部隊はいなかったが、空中戦より度胸が

いった。

昭和二十年七月

有川大尉、山口、大村軍曹四機、屏東上空の防空任務を命ぜられ出撃。屏東上空にて二時間上空掩護をして帰還する。

昭和二十年七月

シナ海海岸偵察のため、四機出撃。途中、悪天候のため三機帰還。木村曹長のみ無事任務を完遂して、夜間飛行にて帰還し、師団長より賞詞を受ける。

昭和二十年八月十五日朝

飛行機試運転、中国上海飛行場経由、北朝鮮に行くこととなったが中止の命あり。正午、天皇陛下の玉音放送あり、終戦を知る。

昭和二十年八月二十日

早朝二時頃、部屋にて銃声聞き、起きてみると玄武特攻隊要員の少飛一〇期生の栗木軍曹が拳銃をくわえて自決していた。

昭和二十年九月

台中の奥地の埔里に入り自活を始める。熱帯熱マラリア(体温四二度)にて入院。退院後、

復員まで炊事班長を務める。

昭和二十一年二月十九日

復員。鹿児島港に上陸。部隊解散、帰郷。

(大村 記)

父と赤紙

私と特攻隊

福井県 矢部 善 昭

まえがき

私は公民館長時代から、地域の「かたりべ」として生涯学習に携り、高齢者、青少年、婦人グループ、小学校児童達に、戦争体験、戦時の耐乏生活、B29空襲、学童疎開、原爆被害、劣勢な科学校戦など模型や紙芝居で話をしている。同時に当時の国家観、親子関係、人間の絆などすべてが否